様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月５日現在

機関番号：３２６２１
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2008～2011
課題番号：２０３３０１０３
研究課題名（和文）
日本帝国崩壊後の人口移動と社会統合に関する国際社会学的研究
研究課題名（英文） Global Sociological Study on Migration and Social Integration after the Fall of the Japanese Empire
研究代表者
蘭 信三（ARARAGI SHINZO）
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号：３０１５９５０３

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は以下のようである。まず、(1)第二次世界大戦後の東アジアにおけるひとの移動は日本帝国崩壊によって策定された新たな国境線によって引揚げ、送還、残留、定着という大規模な人口移動と社会統合がなされたことを明らかにした。しかし、(2)例えば日韓間の「密航」や中国朝鮮族居住地域と北部朝鮮間の移動のように、冷戦体制が整うまでは依然として残る個々人の戦前期の生活戦略による移動というミクロな側面も継続されていたことを明らかにした。そして、(3)帝国崩壊後も中国に残留した日本人の帰国のように、それは単純に「遅れた帰国」という戦後処理（コロニアリズム）の文脈だけではなく、日中双方における冷戦体制崩壊後のグローバル化の進行という文脈、という二つのモメントに規定されていたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The achievements of this research are the followings: Firstly, (1) we explored that the migration in East Asia after the W.W.Ⅱwas a migration, such as repatriation, sending-back, remaining and settlement, in a huge scale brought by the newly designed borders due to the fall of the Japanese Empire, and social integration. However, (2)we also made clear that until the Cold War regime had been settled, also micro side of migration were seen, that were determined by the life strategy of each person, such as the “smuggling” between Japan and Korea or the migration between the Chinese-Korean residential area and northern part of Korea. Moreover (3) it was not just a “delayed return”, like the case of the returning of the Japanese who had remained in China after the fall of the Japanese Empire, which was determined in the context of colonialism, but also by two moments; one was the collapse of the Cold War regime both in Japan and China and the other the context of globalization.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
2009 年度	3,400,000	1,020,000	4,420,000
2010 年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2011 年度	2,400,000	720,000	3,120,000
総　計	13,800,000	4,140,000	17,940,000

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：国際社会・エスニシティ
キーワード：人口移動、社会統合、日本帝国の崩壊、引揚げ、国境線の変更、送還、密航、戦後東アジア地域の再編

１．研究開始当初の背景

本研究課題の前史は、帝国研究の流れや大江志乃夫ほか編『帝国の膨張と人流』（岩波書店、1993 年）に触発され、帝国をめぐるひとの移動というテーマを中心に据えたことにある。2005 年に主催したシンポジウムを基に帝国形成と崩壊後のひとの再移動を対象とした拙編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』（不二出版、2008 年）へと結実させた。しかし、拙編は日本帝国をめぐるひとの移動研究を本格化させたが、それは個々に行われた個人研究を集めたものでしかなく、統一性の低い試験的なものだった。しかも、90 年代以降のひとの移動研究は、歴史的な移民史研究・社会史研究だけでなく、社会学的な研究も本格化しており、それらを統合するという目的を持ち、しかも拙編では手薄だった帝国崩壊後を主な対象とする研究を目指し、以下のような研究目的と研究方法によって本研究を始めていった。

２．研究の目的

まず(1)日本帝国期の植民地及び満洲における人口移動と社会統合に関するメカニズムを国際社会学的に明らかとすること。ついで、(2)日本帝国崩壊後の植民地及び満洲における交錯する人口移動とそれに伴う社会統合のメカニズムを国際社会学的に明らかとすること。さらに、(3)終戦直後の人口移動だけでなく、グローバル化が進行する現代までをも射程に入れてグローバル化期の人口移動と社会統合についてポストコロニアリズムの視点から明らかとすること。最後に、(4)帝国崩壊後の人口移動と社会統合に関して日本を中心としながらも、仏・独・蘭における状況を比較考察することで、帝国崩壊後の人口移動とそれに伴う社会統合メカニズムの個別性と普遍性を明らかにすることを目指した。

３．研究の方法

本研究の方法は、①文献資料の収集と批判的検討という歴史学の伝統的な実証研究法と、②フィールドワークによる調査、とりわけライフヒストリー法による聞き取りとその解釈という主に社会学で用いられる方法を主とした。そして、③帝国内のそれぞれの地域の個別性と普遍性を比較する帝国内比較研究だけでなく、欧米帝国における帝国崩壊後のひとの再移動に関する研究との国際比較研究をひとつの方法とした。

４．研究成果

上記目的を実行するため、2008年6月には拙編『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』（不二出版、2008年）を刊行し、その合評会は多くの参加者を得て本研究の出発点とした。2009年夏には札幌でシンポジウムを開催し、また翌2010年には福岡でシンポジウムを開催し、それらの成果を2011年には拙編著『帝国崩壊とひとの再移動－引揚げ、送還そして残留』（アジア遊学145号、2011年）に結実した。他方で、中国残留日本人という個別テーマについて拙編著『中国残留日本人という経験』（勉誠出版、2009年）を刊行した。そして2012年3月には「帝国崩壊と人の再移動をめぐる国際比較研究」という国際シンポジウムを開催した。それらの共同研究の結果、とりわけ、中国残留日本人の経験がコロニアリズムとグローバリズムという異なるモメントに規定されており、また満洲における朝鮮族が公民として包摂されていく状況、朝鮮から日本人が引揚げる際の韓国社会の対応、ソ連軍占領後の樺太における日ソ朝の「共生」とそこからの引揚げ、沖縄をめぐる台湾、南洋、満洲からの引揚げと戦後の状況に関する状況等が詳細に明らかにされた。

上記の3冊の刊行は大きな成果であり、その後は研究班のほぼ全員が研究報告を行いそれぞれの目的を追求した。とりわけ、このコロニアルな状況が90年代のグローバル化とどのように関連しているかを共通課題として追求していった。なかでも、フィリピンにおける旧日系人と新日系人の関わりが日本語教育をめぐる交錯を生み出しているプロセスが明らかにされた。

さらには、仏帝国、独帝国、蘭帝国という西欧帝国の崩壊とその後にひとの移動に関する国際比較シンポジウムによって、帝国崩壊後の引揚げ（追放）という普遍的なひとの移動が生じた一方で、蘭印における日蘭の結婚・混血児の存在が必ずしも分断だけでなく、時空を超えた関係性を生み出すことを確認した。このことで、本研究班が追求してきた現象が普遍的に存在することが確認された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６件）

① 飯島真里子「戦前期日本人コーヒー栽培者のグローバル・ヒストリー」『移民研究』査読有、第７号、2011 年３月、1-24 頁。

② 高畑幸「在日フィリピン人社会の現状分析――第一世代の加齢・高齢化と新日系人の流入を中心に」『部落解放研究』、査読有、17 号、広島部落解放研究所、2011

年１月、67-83 頁。
③ 福本拓「東京および大阪における在日外国人の空間的セグリゲーションの変化」『地理学評論』査読有 83 巻、2010 年、288-313 頁。
④ 野入直美「『アメラジアン』という視点」社会理論・動態研究所『理論と動態』、査読有、第２号、2009 年 10 月、18－39 頁。

〔学会発表〕（計２６件）
① 高畑幸「永住フィリピン人女性の生活世界」（東南アジア学会、統一シンポジウム「日本の中の東南アジア～滞日ニューカマーを中心に」2010 年 12 月 5 日、東洋大学。
② 外村大「日本社会と在日朝鮮人―戦時体制、解放と戦後の再編」国立ソウル大学日本研究所主催シンポジウム「国民国家日本の境界とディアスポラ」、2010 年 11 月 25 日、ソウル市、国立ソウル大学校日本研究所。
③ 外村大「日本帝国と朝鮮人の移動」、韓国日本史学会主催シンポジウム「韓国併合と日本帝国主義　帝国秩序に及ぼした植民地の衝撃」2010 年 11 月 20 日、ソウル市祥明大学。
④ SAKABE Shoko, Multi-layered Memories of “Manchuria” in a Border Town, The 7th East Asian Sociologist Network Conference、成城大学、2009 年 10 月 8 日。
⑤ IIJIMA Mariko, Revisiting the Second Homeland: Contested War Memories of Philippine-born Japanese Repatriates, The 7th East Asian Sociologist Network Conference、成城大学、2009 年 10 月 8 日。

〔図書〕（計３０件）
① 野入直美「ディアスポラと“ローカル”－ハワイにおける帰米とアメラジアンの事例から－」白水繁彦編『多文化社会ハワイのリアリティー　民族間交渉と文化創成』2011 年 3 月 20 日,145－180 頁。
② 高畑幸「意味ある投資を求めて――日本から帰国したフィリピン人による出身地域での起業」、竹沢尚一郎編著『移民のヨーロッパ――国際比較の視点から』明石書店、2011 年 3 月、218-243 ページ。
③ 外村大「朝鮮人労務動員をめぐる認識・対応・矛盾　1937~1945 年」 黒川みどり（編）『近代日本の「他者」と向き合う』解放出版社、2010 年 11 月、200-226 頁。
④ 蘭信三(編)『中国残留日本人という経験』勉誠出版、2009 年、全 720 頁。
⑤ 蘭信三(編)『帝国崩壊とひとの再移動－引揚げ、送還、そして残留』勉誠出版、2011 年、全 240 頁。

〔その他〕（計５件）
【本科研費研究班主催シンポジウム】
① シンポジウム「帝国崩壊後のひとの移動と社会統合に関する国際比較研究」2012 年３月 16 日、上智大学、東京都。
② シンポジウム「2010 年、いま戦後引揚げを問う―帝国崩壊と東アジア社会」2010 年９月 18 日、九州大学、福岡市。
③ シンポジウム「近代満洲の成立」2010 年 7 月 30 日、大阪大学、大阪市。
④ シンポジウム「帝国崩壊と人口移動」2009 年８月 23 日、北海道開拓記念館、札幌市。
⑤ 「満洲移民国際シンポジウム」2009 年 1 月 31 日、京大会館、京都市。

６．研究組織
(1)研究代表者
蘭　信三（ARARAGI Shinzo）
上智大学・外国語学部・教授
研究者番号：３０１５９５０３

(2)研究分担者
外村　大（TONOMURA Masaru）
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：４０２７７８０１

野入　直美（NOIRI Naomi）
琉球大学・法文学部・准教授
研究者番号：９０２６４４６５

松浦　雄介（MATSUURA Yusuke）
熊本大学・文学部・准教授
研究者番号：１０３６３５１６

上田　貴子（UEDA Takako）
近畿大学・文芸学部・准教授
研究者番号：００４１１６５３

坂部　晶子（SAKABE Shoko）
島根県立大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：６０４３３３７２

高野　和良（TAKANO Kazuyoshi）
九州大学・大学院人間環境学研究院・准教授
研究者番号：２０２７５４３１

高畑　幸（TAKAHATA Sachi）
静岡県立大学・国際関係学部・准教授
研究者番号：５０３８２００７

飯島　真里子（IIJIMA Mariko）
上智大学・外国語学部・准教授

研究者番号：１０４５３６１４

花井　みわ（HANAI Miwa）
早稲田大学・社会科学総合学術院・准教授
研究者番号：７０５７８４７６

竹野　学（TAKENO Manabu）
北海商科大学・商学部・准教授
研究者番号：００３６０８９２
（2011 年度のみ）

福本　拓（FUKUMOTO Taku）
三重大学・人文学部・研究員
研究者番号：５０４５６８１０

大久保　明男（OOKUBO Akio）
首都大学東京・教養課程・准教授
研究者番号：１０３４１９４２
（2008 年度、2009 年度、2010 年度）

倉石　一郎（KURAISHI Ichiro）
東京外国語大学・外国語学部・准教授
研究者番号１０３４５３１６
（2008 年度のみ）

山本　かほり（YAMAMOTO Kahori）
愛知県立大学・社会福祉学部・准教授
研究者番号３０２９５５７１
（2008 年度のみ）

田村　将人（TAMURA Masato）
北海道開拓記念館・学芸員
研究者番号：６０４１４１４０
（2008 年度、2009 年度、2010 年度）

(3)連携研究者
田村　将人（TAMURA Masato）
北海道開拓記念館・学芸員
研究者番号：６０４１４１４０
（2011 年度）